
ありきたりな僕等の。

蜜月 &りえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありきたりな僕等の。

【著者名】

N1361E

【作者略】

蜜月＆りえ

【あらすじ】

倉本愛（14）は若葉中学、ソフトボール部キャプテン。赤西誠（14）の事が好き。それなのにある日誠の双子の弟、郁に期限付きの賭けを持ち掛けられて・・・？

1話 僕とあたし

夏のよつな暑い日 若葉中学のグラウンドは今日も活氣づいていた。

カキン

「おーい そんななんじや次の試合勝てないよー。」

倉本 愛（くらもと あい）（14）若葉中学、ソフトボール部キャプテンです。

「もう一発いくよ！」

そういうて茶色に薄汚れたボールを投げかけたとき足元に一つボールが転がってきた。

「すいません・・・あ」

「あ

「なんだ愛ちゃん

「誠！」

赤西 誠（あかにし せい）（14）野球部のキャプテンでわたしの幼なじみ。野球をやって いるのも誠が野球をしていったからなんだ。

あと、わたしにとつて誠は

「野球 がんばれよっ」

あたしの好きな人

わわつがんばれよつていわれちゃつたよ はずい・・・めつちやはずい！今顔赤くならなかつた

よね！？

そんなことを考へて いるうちで誠はいつてしまつた・・・。

「せん・・・」「せんぱ・・・」

「せんぱい・・・」

あつヤバぼうとしてた。

「ゴメン今なげる！」

更衣室 今日誠に言われた言葉が頭の中で鳴り響いてる。

「おつかれ」

そういうて更衣室を出た。

誠に言われた言葉のことを考えてるついでにこつしか誠のことを考
えていた。誠はとは仲良し、
誠とは幼なじみ・・・誠はあたしのことをどう思つていい? 答
えは一つ

＝友達＝

田の前には幼なじみのかべ。「好き」なんて言わない、絶対に。
気づけば縁にそまつた桜並木の下を歩いていた。

そして田の前に

「よつ」

誠がいた。

1話 僕とあたし（後書き）

この小説は蜜月とりえが一人で書いたものです。

1話、ことに文の書き方など多少変わりますが、楽しんで頂けたら嬉しいです。因みにこの回＆サブタイトルはりえが書きました。
感想、アドバイス等有りましたらビシビシコメントを送って下さい。
とても喜びます^v

2話 幼馴染の壁はそれはもつと高く、重い。

目の前には幼なじみの壁。「好き」なんて言わない、絶対に。
気づけば緑にそまつた桜並木の下を歩いていた。

そして目の前に

「よひ
せい
誠がいた。

「・・・誠」

「何? どしたの暗い顔して」

「別に! 全然つ暗い顔なんてしてないしつ!」

誠の事で悩んでいた、だなんて言えない。そんな事言えた
ら告白なんてちょろいものだ。

わざと笑顔を作つてみせると誠はほつとした様な表情になつた。

「いや、お前先刻赤くなつてたからさー・・・。何かあつたのかと思」と言いかけた誠の口を塞ぐ。

「いや、全然赤くなつてないつて! 熱かつたからだよ! 気のせい気のせいッ!!」

「ふ! ? んおうふッ」

鼻と口をすっぽりと塞いでしまつた誠の顔は見る見る青くなつていぐ。ぎやつ、と悲鳴を上げて力が入つていて手を離した。

「う! ごめんッ! えと、じゃー帰るねッ!」

誠が何か言いかける前にソフトボール部でみつちりと鍛えた足で逃げる。

恥ずかしい! 恥ずかしすぎる! -!

猛スピードで緑に染まつた桜並木の道を思い切り走る。と、同時に桜がビヨウビヨウウと激しく散る。もう桜の木は緑色に近い。そして桜がうやうやしい程顔に付く。振り払うがしつこく纏わり付いてくる。

「ああつもう！」

思わず叫んでしまった。そして今まで急スピードに走っていた足が止まつて空を仰ぐ様に上を見た。

告白してしまいたい けれども簡単には告白できないのが関の山である。

幼馴染という壁はそれはもう高く、重い。

告白してそれ以上になるといつのが恐い。いや、それ以下になるが凄く恐い。

誠ともう喋れなくなつたら ・・・と考へると胸がチクリと痛んだ。

「なーに悩んでんの？純情娘？」

「な

ひょこっと後ろから誠が じゃなくて誠の双子の弟、赤西郁だ。因みに一卵性の双子で顔がとってもソックリなのにとっても性格が似てない。小説とか漫画とかで出でてくる良くあるパターンだ。そういうのは双子が主人公を取り合つとかどちらが好きなんだとか純情っぽく悩むみたいなありきたりな設定だが（いやあたしの恋も充分ありきたりだけど）、そういうのは絶対無い。

あたしが好きなのは誠だ。

この馬鹿で毒舌な男は好きにはならない。そして誠と同時に郁とも幼馴染なのだ。

「純情娘つてそういう時期なのッ！純情で悪かつたなッ！」

「ふーん・・・誠の事好きなんだやっぱ

見透かした様に誠ソックリの顔があたしの顔を覗き込む。思わず恥ずかしくなつて顔を自分でも分かる程思いつきり逸らした。「ち、違ツ！」本当は好きだけどコイツには知られたくない！という反感から全く逆の答えが口から飛び出す。

「じゃ、俺と付き合つてくれるよね？」

思考が固まる。

そんな瞬間を狙つたのかどうなのかスルリと郁の手がうちの体に回される。世間ではこれを抱きしめたというのか。

それにしてもどうして誠が好き？ 違う 僕と付き合えになんの口イツは。かなり魂胆がミエミエだ。

「離せつつ変態タラシ男ツ！」

鍛え抜かれた自分の右手が郁の首筋にチヨツプを食らわす。鈍い音がして郁のう、という呻きと共に自分に回された手が緩む。その隙を狙つて最後の止め 腹に勢いよく蹴りを入れた。

ゲシツ

「痛つ・・・・・！」

「ふん、ザマーミロ」

郁はしゃがみ込み腹を摩りながらいて・・・と呻いていた。たとえ好きな人の弟であり、どんなに顔が似ていっても容赦はしない。

「乙女に抱きつくとは何事ツ！？ 誠とは大違イツ！」

「なツ・・・誠とはとか言ひなつつのーそういうお前は好きなんだろ兄貴の事！」

「ああ好きだよツ！ あんたとは大違イね・・・つてあれ？」

思わず口が滑った。

郁の顔が少し歪んだ様に見えた様な・・・と思つたら氣のせいだ。郁はゆっくりと立ち上がった。

「じゃ、賭けしてみない？ 期限は一ヶ月。愛が兄貴と両想いになれたら愛の勝ち。で、なれなかつたら負け。お前が負けたら僕と付き合つてね」

「ちょツ・・・勝手に決めないでくれる？ 大体あんたと付き合つなんて

「自信ないんだ？」

プツツ

自分の何処かの線が切れた音がした。言ってくれたなコイツ！
「いい！ やるツ！ その代わり郁は負けたら、何でもいう事聞いても

「ひつかりねッ！」

「じゃ、頑張ってね～」

「生憎言われなぐても頑張る主義ですんでー！」

「ひつじで、この日から期限付きの郁とあたしの賭けが始まった
。 。 。

2話 幼馴染の壁はそれ程つまつて、重い。（後書き）

サブタイトル＆2話は蜜月が書きましたー。2話の方が若干読みにくいかと（泣
で、愛の一人称は「あたし」なのですが時々間違っているかもしだせん＾＾；
感想、アドバイス等有りましたらいどこどしコメントを送って下さい

v

3話 む泊り金ッ！？

期限付きの賭けかあ・・・。

あたしはぼうっとしながら帰り道をてくてく歩いていた。夕日が眩しい。

勢いにのってあんな賭けをしてしまつとは・・・。あたしつて危ない奴だな〜・・・。

そんな事をぼちぼち考へて居る間にも第三公園の前にまで来ていた。第三公園とはそのまんまの意味の公園で、第一も第二も無いのに第三公園があるのはこの町のミステリーだ。

ブランコだけしかない公園。

あたしはぼうっと熱に酔つた様に見ていた。

・・・・・懷かしいなあ。

ぼうつとそんな事を考える。昔よく誠^{せい}や郁^{いく}と遊んだ公園だ。あの頃は楽しかったなあ・・・。

自然と足が公園へ進む。そして自然とブランコに腰掛けていた。足を不自然に曲げなければ上手く座れなくなつていて。そんな事すら成長したんだな、としみじみ思つていた。

・・・・・

・・・・・

・・・・・平和だ・・・。

のんびつとそんな事を考える暇ひえ出来てしまつ。これこそ公園

ミラクルだ。幻に近い。

賭けも勝てばいいんでしょ・・・、と思つ。頭がぼー・・・・としていた時・・・。

「誠ツ！？」

公園の田の前に誠がふらりと現れる。行き成りの出来事に絶句した。

誠は「あ」と声を小さく漏りじてあたしの方を向く。夕田のせいで逆光で黒く見える。

「どうしてこんな所に・・・」そう言しながら誠の方に駆け寄る。この公園とは真逆の方向に誠の家がある。それなのにどうして、と思つて今更ながら気づく。あたしが正解を口に出す前に誠が口を開いた。

「いやー・・・俺、此処が何処だか分からなくなっちゃつてやあ・・・」

「やつぱり・・・」

声にもならないため息ができる。

はつきつ言つと誠は超超方向音痴だ。

何処でも迷う。地図があつても迷う。2択でも迷う。道なき道をさ迷う。

でもそんな所が好きなのだ。あたしは。

あたしは公園ミラクルで誠の方向音痴の事をすっかり忘れていた。恐るべしミラクル。と、誠の手元にある地図に田を移す。

「誠・・・地図があるでしょ・・・？」呆れながら、そして無駄な質問を誠に投げかける。

「ああ、これ？何か知らないけどこの地域が載つていないんだよ。何でだろ？」「

と、手元に持つていた地図をあたしに見せる。受け取ったあたしは絶句した。

「・・・これ、世界地図じゃない・・・」

「え？マジ？・・・いやー・・・何でだろ？なあ・・・。言つとくけど俺は迷子じゃないよ？」

「迷子だろ？」「」

「……ふう。何も分かっちゃいないね愛は。俺の進む道に迷いないッ！きつとじの地図が広すぎただけ！だから迷子じゃな」

「迷子だ」

あたしはキツパリと言い放った後、そういえば……と仄ひぐく。賭けしてたんだった……。

「誠

「ん？」

暫くの沈黙。

「あたし……誠の事がツ！」

一旦言葉を切る　　と同時に叫ぶんだあたしツ……！

「なーにやつてんの二人とも？」

ひょこっと何処から現れたのか誠とソックリの顔が誠の後ろから飛び出す。

「ぎやわツ！い、郁？」

「また会つたね」

双子の弟……郁は一口ツと笑う。口イツは何処から出てきたんだ！神出鬼没かツ！

あたしは心の中でつっこみをしていたが口が回らない。パクパクと魚の様に動かすだけ。だって今誠に告白しようとしていたんだから……。

「何やつてんの愛？魚のモノマネ？」

分かりきつた顔であたしの方を見る。分かつてくせにツーと顔が熱くなる。

「ち、違ツ！今あたしは誠に……」

「誠に？」

「・・・せ、い、に・・・・・」

「い、いえない。

だって誠の事が好きだ、なんて人前で言えたらもう言えてるし。それなのに郁はニヤニヤとした笑いであたしに尋ねる。

「何でもないッ！…」「…

ああもう恥ずかしいッ！…最悪ッ！…！…！

「…・・・じや、もう帰るね」

あたしは踵を返して歩き出さうとするが、

「？・・・行くの？」

「え？」

誠がぽつりと呟く。口元がぱたこと上
まつた。

「明日土曜だし、」

「うん？」

「泊まつていかない？家に

「うん？」

賭け1円戻して・・・、

チャンス到来！？（なのがどうなのか
とにかくあたしは誠の家でお泊まり会っをする事になつたのだった
・・・。

謝り　お泊り会っしー？（後書き）

この回は蜜月が書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1361e/>

ありきたりな僕等の。

2011年1月8日02時11分発行